

國學院大學學術情報リポジトリ

国際研究フォーラム報告書2008～2013年度

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-15 キーワード (Ja): NDC9:160.4, NDC9:161.3, 宗教, 宗教学. 宗教思想 キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001576

宗教文化教育の射程 —文学と美術をめぐる—

平藤喜久子

開催概要

【日時】2012年9月29日（土）13時～18時

【場所】國學院大學学術メディアセンター常磐松ホール

【司会】

井上順孝（國學院大學）：宗教社会学

【パネリスト】（発題順）

Roberta Strippoli（Binghamton University SUNY, USA）：中世日本文学

有田英也（成城大学）：現代フランス文学・思想

小池寿子（國學院大學）：西洋中世キリスト教美術史

Mark MacWilliams（St. Lawrence University, USA）：ポップカルチャーと宗教

【コメンテーター】（コメント順）

加瀬直弥（國學院大學）：中世神道史

伊達聖伸（上智大学）：宗教学

平藤喜久子（國學院大學）：宗教学・神話学

小原克博（同志社大学）：宗教学・キリスト教思想

【プログラム】

- | | | |
|-------------|---------|--|
| 13：00－13：10 | 趣旨説明 | 井上順孝 |
| 13：10－14：00 | 第1セッション | STRIPPOLI Roberta「古典文学のなかの宗教」 |
| | コメンテーター | 加瀬直弥 |
| 14：05－14：55 | 第2セッション | 有田英也「運命に抗う人びと—宗教で読むカミュの『ペスト』」 |
| | コメンテーター | 伊達聖伸 |
| 15：05－15：55 | 第3セッション | 小池寿子「『死の舞踏』に見るキリスト教的死生観」 |
| | コメンテーター | 平藤喜久子 |
| 16：00－16：50 | 第4セッション | Mark MacWilliams, “Resurrecting Jesus—Pop Cultural Transfigurations of the Savior in Film, Manga, and Anime” |
| | コメンテーター | 小原克博 |
| 17：00－18：00 | 総合討議 | |

【趣旨】

宗教文化は、宗教学に関わる研究領域（宗教社会学、宗教心理学、宗教民族学、宗教民俗学、宗教哲学、宗教現象学、宗教地理学など）以外にも、文学、美術、建築、音楽、映画、法律、経済等々、広い学問領域と関わっている。日本及び外国の宗教文化の理解を深めるための宗教文化教育の教材を考えたとき、こうした宗教文化の広がりやを踏まえる必要がある。

2009年には宗教文化教育の教材の一つとして映画を位置づけ、映画にどのような可能性、利用法があり、また問題点を孕んでいるかを議論するフォーラムを開催した。今回は文学、美術（アニメやマンガも含む）を中心とし、それぞれの分野の研究者に、授業や研究において宗教文化に関わるテーマをどのように扱っているかを発題してもらい、宗教文化教育の教材として文学や美術を活かすために、どのような方法があるのか、また文学や美術を学ぶために必要な宗教文化の知識とはどのようなものか、などの点を議論する。

【会議概要】

1. 趣旨説明

井上順孝

タイトルにある宗教文化教育だが、宗教文化という、すぐ連想されるのは、神社仏閣、あるいは教会などの宗教建築や仏像といったものなどだろう。これは間違いなく宗教文化を構成している。一方で我々の生活の非常に身近なところで、宗教文化は、いろいろな形にあらわれている。これは物の見方にもよるもので、日本人の約7割が行くとされる初詣も、神社や寺院の視点から見れば、祈りの姿勢だといえる。このように宗教文化とは、宗教施設あるいは宗教を中核にした部分と、日常生活の中で無意識のうちにを行う部分とがあるだろう。今のようなグローバル化した社会では、むしろこういう日常生活の中に溶け込んでいる宗教文化を理解することが、より重要になってきたのではないだろうか。

このような発想のもと、これまで国際研究フォーラムでは、映画と宗教の関係、観光と宗教の関係、あるいはイスラームそのものを扱ったテーマを企画してきた。今回は、文学と美術を取り上げることとしたが、文学といってもさまざまなジャンルがあり、美術も幅広い。ポップ

カルチャーのマンガやアニメも含まれる。これらあまり宗教とは思わないで接しているもののの中に潜む宗教的なテーマを取り上げ、あらためて我々と宗教文化とのかかわり、そしてさらには大学における宗教文化教育という点から、お互いに理解を深めるための工夫なども考えたい。

最近はメディアが大変発達し、教育の場もテキスト主体から動画などが自然と取り込まれるようなものに変化している。そうした時代であることも考え、どのような教え方、どのような教材の取り上げ方、またそれらのコンビネーションと展開のさせ方などにも問題が出てきている。このフォーラムでは、いろいろな分野からの発題者を迎えたが、それは教育する側のコラボレーションが、今の時代に対応するためには必要なのではないかという認識に基づいている。

以上のような目的によって今回の企画が実現した。

2. 第1セッション「アメリカの大学生に日本古典文学における宗教を教えること」

STRIPPOLI Roberta

【発題】

本発表では、アメリカの大学生に日本の古典文学における宗教的テーマを教えることについて考察する。日本の古典文学には宗教的な内容を持つものが多く、その宗教についての知識が

ないと、テキストが理解できない。そのことを踏まえて、ここでは問題点、対策、教材という三つの観点から考えたい。

①問題点

日本の古典文学をアメリカで教えるにあたっての問題点の一つは、多様性にある。そこには宗教の多様性もある。同じ文化、同じ時代に住んでいても、個人によって宗教の持つ意味は多様だ。また、学生の多様性もある。まず、発題者はアメリカで教えているイタリア人である。今学期担当している『源氏物語』とその世界』という24人のクラスでは、アメリカ人といっても中国系アメリカ人、韓国系アメリカ人が多く、留学生もいる。学生たちはそれぞれ異なったバックグラウンドを持つといえる。そのためディスカッションは大変興味深いものとなるが、宗教についてはその背景によって理解の仕方が異なるため、教える側としては難しい。

たとえばクラスにはキリスト教の信者、またヨーロッパの歴史を学んだ経験のある学生が多い。となると日本の11世紀、12世紀、13世紀といっても、ヨーロッパのそれを思い描き、宗教の状況についてもヨーロッパの歴史で考えてしまうことになる。

そしてもう一つ日本宗教の多様性もある。神道、仏教、そして仏教のなかでも菩薩、無常、因果、往生、本地垂迹といった概念があり、さらに道教、儒教、キリスト教も含まれている。そうした状況を日本について何も知らない人に教えることはきわめて困難だ。

大学には日本文学、中国文学、韓国文学などの講座があるが、日本の宗教を教える人はおらず、アジア宗教となるとインド仏教の専門家しかいない。日本の古典文学を学ぶために日本宗教の授業を履修して欲しいが、それはできず、インド仏教を学ぶと日本の仏教とは大きく異なってしまう。このように体系的な知識の学びができないことも問題となる。

②対策

そこで授業では、それぞれの宗教のイメージから離れるように指導する。そしてディスカッションを活発にするようにする。『源氏物語』の授業では、最初の「桐壺」の巻の冒頭から、天皇と更衣との前世の契りの話や、出産や死に際しての宿下がり話など、仏教的な考えも含め、学生には理解できないことが多い。そのため毎回小レポートを書かせ、疑問点や意見などを明らかにし、ディスカッションにつなげていく。

本来ならば適切な教科書を提示できたらいのだが、宗教のテキストは仏教、神道というように別々に章立てがなされることが多く、同時代の宗教状況を俯瞰するような見方が学びづらいものが多い。また文学というフィクションのなかの宗教と現実の宗教という問題もあるだろう。

ただ、いまはインターネットもあり、豊富な情報に簡単にアクセスすることができるようになっていたため、國學院大学の Encyclopedia of Shinto をはじめ、信用できるウェブサイトを生徒に活用させ、勉強させるようにしている。

③教材

前述したように授業では『源氏物語』の英訳を読んでいるが、この作品はきわめて豊かなテキストで、宗教のいろんな点がわかるという利点がある。とくに生徒が興味を示すのが怨霊で、六条御息所が生霊となって夕顔と葵上を殺す場面はディスカッションがとても盛り上がる。文学では『平家物語』や『御伽草子』も教材として取り上げている。

能や浄瑠璃なども取り上げるが、なかでも謡曲『敦盛』は、戦で死んだ武士の怨霊の鎮魂ということで、これもまた生徒は高い関心を示した。

浄瑠璃の『菅原伝授手習鑑』の「寺子屋」の段では、主人公の松王丸が恩のある菅原道真の息子を助けるために自分の子を犠牲にする。この内容に生徒たちは大変驚き、日本文学は珍しい、おかしいという反応が出た。そこで、旧約聖書でアブラハムが神に信仰心を示すため、息

子のイサクを殺そうとした話をしたところ、学生たちはその話はよく知っていたので、先ほどの「寺子屋」への感想を見直すことになった。日本文学を学びながら、自分の宗教を見直し、新しい視点を得ることができるようになるという例だろう。

人文科学は何の役に立ち、教員はなにを与えることができるのだろうかとよく考える。一つはほかの世界を学び、自分の世界を違う視点から見るができるようになるということだろう。またもう一点、その知識を得るプロセスを知ることができるという点も人文科学を学ぶ利点だろう。日本宗教の学びも、多様な世界を理解するためのツールの一つに資することができるのだ。

[コメント]

加瀬直弥

日本の古典文学を学ぶことが宗教文化教育につながることは間違いない。海外で日本とはあまり関係なく育ってきた学生に日本の宗教文化を説明する難しさはあるだろうが、日本人であっても古典と親しみ、宗教文化の知識を持つ学生は多くない。その点で共通の問題を抱えていると感じる。

中世の宗教史についていうと、顕密体制論や中世神道といったように、ある概念について割り切った定義をすることは可能だ。しかしストリッポリ氏が述べたように、中世の宗教状況の多様性は伝わらない。こうした問題を考えるための教材、素材の提供の必要性があるのではないだろうか。

古典文学についてもデータベースを作成するといったことも考えられるだろう。たとえば『源氏物語』では、光源氏が須磨へ下り、不遇の生活を送るが住吉の神に祈りを捧げ、のちに天皇の外戚となって栄達を遂げ、お礼参りをするという話がある。そこから住吉の神、住吉神社（住吉大社）の説明がつながるような素材の作成も可能だろう。

まずはきっかけとなるような例に神や仏、神社や寺などをつないでいくような形で教材を作成する。日本古典文学大系の注にでてくる宗教用語の説明や画像提供などもあるだろう。このように古典文学の教育が宗教文化教育につながっていくような工夫を考えてみたい。

[質疑応答]

会場からは、『源氏物語』を授業で取り上げていて、キリスト教的倫理観、あるいは儒教的倫理観から光源氏の恋愛遍歴がどうとらえられているか、また、『源氏物語』における帝（天皇）の位置づけを、どう伝えていくか、などの質問がでた。

前者については、宗教的な価値観からというよりも、ジェンダー的視点からプレイボーイに対して嫌悪感を抱く傾向にあり、授業の前半では、光源氏の良さは伝わらず、悪い人のように思われる。そこでディスカッションでは、『源氏物語』はあくまでフィクションであり、また現代の男性との比較ではなく、物語世界のなかでのほかの男性たちとの比較をする必要がある点に気づくようにする。そうすると授業の後半部分では、光源氏を好きになる学生が多いとの回答があった。

後者については、『源氏物語』の授業は、さまざまな専攻の学生が履修するもので、数学や工学専攻の学生もいる。日本について学ぶ唯一の授業となっている場合も多く、天皇の位置づけなどを伝えるのはきわめて難しいが、ステップ・バイ・ステップで進めていくしかないと考えているとした。

3. 第2セッション 「運命に抗う人びと—宗教で読むカミュの『ペスト』」

有田英也

[発題]

カミュは1947年6月に小説『ペスト』を発表した。その主題は、194×年に、実在するオラン、つまり、アルジェリア海岸におけるフランスの

一県庁所在地で起きた架空の伝染病である。

小説の中でこの疫病は1年間猛威を振るった後、突如退潮する。それはあたかも運命が人間に与えた不条理な悪を象徴するかのようだ。東日本大震災の直後に作家の辺見庸が作中の医師の言葉「ペストと戦う唯一の方法は誠実さということです」という言葉を紹介した。たしかにこの小説は小賢しい人間の想定を超えた自然の猛威と、例えば放射能のような見えない恐怖までも象徴するといえるだろう。この小説は、多くの住民がそれを運命とみなして耐えるばかりであった悪に対し、敢然と立ち向かう人々を描く。その点で辺見庸は『ペスト』を行動の指針を示すフィクションとして参照したといえる。

では、こうした観点から『ペスト』を読んでいきたい。不慮の出来事への対処は、人ごとに異なる。しかし住民全体を平等に襲う災害について、とくにそれが徐々に進行する場合には、しばしば集団的反応が見られる。そして外部から特権的な参照物が示されると、経験と知識で判断すべき人であっても、自分で判断することを留保したがるものだ。

そのことは物語のなかでの医師の行動によく表されている。ネズミの大量死やチフス性の熱病による人間の大量死がではじめた頃、招集された保健委員会でオラン医師会の会長はペストである可能性を断定することを拒否し、ほかの医師たちも行政担当者も匿名の集団に溶けていく。そして小説の最後に医師と行政担当者は、「病疫が防止されたものとみなされ得ることを宣言する」という腰の引けた安全宣言をする。こうした態度は福島第一原発の事故後の発表を想起させるものだ。

住民の一人一人が信頼できる根拠を求め、それに応じて行動することは、たしかに混乱を招く。では、極限状態になる前に、あらかじめ何を信じて行動するかを人は考えられるだろうか。「できる」と宗教家は答えるだろう、「なさねばならない」と予言者は詰め寄るだろう。政府、識者なら、「できるように努めるが、まず

こちらの言い分に従ってくれ」と言うかもしれない。しかし、カミュがとりわけ強調したのは、個人として信念を貫き、それゆえ、仲間を増やすためにみずからの判断の根拠を絶えず言葉にしようとした一群の人々がいたということだ。

この信念のあり方と宗教にどのような関係があるだろうか。『ペスト』に描かれた人物たちは、描かれ方によって3つに分類できる。名を持ち、その言動が時系列に沿って叙述される登場人物、言動が記述されるが、街角の無名の声として、古代悲劇のコロス、合唱団のように背後に置かれる人物、そして、語り手によって長々と叙述され、解説される状況の中にのみあって、舞台の手前にはいないオラン市民たち、の3者だ。悪と積極的に戦うには、悪が人間の抵抗によって変わり得ると信じなければならぬ。疫病がやがて収束し、自分たちは家族もろとも助かるであろうと期待した第2の人々と対照的に、第1の人々はそれぞれの理由で立ち上がる。

そして、物語は第3の市民の苦痛、抵抗、喜びを、春の兆しの頃から祈祷週間、ペンテコステ、そして万聖節、クリスマスを経て、復活祭に対応する市門開放までの円環的な道程のなかで描き出す。

カミュは、アルジェの出身だが、妻の実家があるオランでの滞在経験がある。その頃カミュは結核に苦しみ、オランの町もユダヤ人排斥の動きや右翼の台頭などで閉塞状況にあった。こうした滞在の経験と小説とが細部にわたって対応しているわけではないが、イエズス会の司祭が説教するカテドラルなど、オランの特徴的な建物は控えめに叙述される。

小説は虚構を正当化するとともに、物語のテーマが監禁状態にあることを述べる。フィクションであるからこそ、読み手は自分の経験や知識を持ち込むことになり、結果第二次世界大戦がおわって二年後に発表された『ペスト』は、戦争の比喩として読まれることとなった。

登場人物は作中で成長し、読者も作品の意味

を考え直していく。その分岐点は運命に苦しむ人々が運命に抗う人々として捉え直されるときだ。運命の捉え方は、市民の大半を占める不信心な人々と、司祭やユダヤ・キリスト教文化の中にいる人とで異なる。

小説『ペスト』で、疫病の流行を運命あるいは自然の摂理とみなして耐えるのではなく、あえて抵抗を試みる人々が3つのタイプで示される。

一つは、医師リウーのように疫病の蔓延は医師と行政の責任だと考えて行動する正義の人々。彼らは神を信じていないので暗闇の中、なんとか見極めようとしている。実践的な無神論といえよう。

これに対し、宗教的信条と矛盾しない限りで人類の救済のために働くイエズス会士パヌルーがいる。彼が説教をし、全聴衆をひざまずかせていく場面は、宗教的言説が不信心な人々の心をつかむ様子を、効果的に描いている。パヌルーの説教は黄金伝説の聖セバスチャン伝（ペストから信者を守る）を引くもので、彼は信者個人に対して、これまでの不信心を悔い改め、不幸にもペストを病んだら、集団的懲罰を運命だったとあきらめるよう勧める。これは死後の救済を対価として、現世での苦しみを合理化するものだろう。パヌルーは疫病によって人間が変わると期待しているとも解釈される。

三つ目が旅行者ながらボランティアで危険な業務に当たるタルーだ。ヒロイズムだといって否定していたランベールもけっきょくは自分の意思で町にとどまり、登場人物としての成長を遂げる。このタイプはペストと闘うかどうかの選択が宗教を介さずになされる点が共通する。

リウーはこの第3のタイプと出会って自分の信念に気づく。パヌルーも次第に疫病についての認識をあらためていく。たとえ神の意図がわからなくても、みずから判断して善をなせと言うようになるのだ。そして、ペストに対してあきらめずに戦うことを説くようになる。

このようなキリスト教の正統から逸脱しかけた司祭こそ、おそらく作者カミュがかろうじて

許容し得る宗教者の姿だったのだろう。

今回の発表は「極限のヒューマニズム」というテーマで大学一年生に行った授業をもとにしている。2012年の日本で『ペスト』を読むときには、この小説に何が足りないかを問うよりもカミュがなにを補おうとして書いたのかを考えるべきだろう。誰もが不合理な暴力の犠牲者になり得る極限状況において、人がともに生きるとき、とりわけ何かに抗して生きようとするときに、不可欠なヒューマニズムをキリスト教道徳のかなたに構築しようとする意思ではないかと考える。

[コメント]

伊達聖伸

この小説には聖セバスチャン伝などさまざまな宗教的事柄が登場する。他方で極限状況で人間がどう振る舞うかという点も描かれる。カミュの時代は宗教的事実とそのような宗教的な感性、ヒューマニズムが緊張関係をはらんでいたのではないだろうか。しかし、時代が下った現代では、そうした極限状況でのヒューマニズムと宗教的な事柄という点がかけ離れているのではないだろうか。そこに授業の存在が関わってくると理解した。

キリスト教の問題として、神は善であり万能であるはずなのに、なぜ人間の悪や自然災害が存在するのかということがある。東日本大震災の後、フランス系の人々は、18世紀半ばのリスボン大地震を参照した。そのときにもこの神義論をめぐるルソーとヴォルテールが論争をしている。ヴォルテールは、大地震について、こんな世界は善なのかと問い、ルソーは自然災害に見えても実は人為災害で、人々の暮らし方によっては被害は大きくならずすんだはずだという。つまり人為と自然の錯綜関係を指摘したのだ。

ではカミュはどうしてペストに注目したのか。人為か自然か、そして悪をどう考えるのかという点から知りたいと思う。

教育の現場での生かし方という点では、発題

者は映像資料など学生が興味を持つような手立てを考えているのか、またカミュの能動的運命論を語ることで、現代の若者に実践的な指針を引き出すつもりがあるのかどうかも知りたい。

[応答]

授業では映像資料、図像などは使わない。それはカミュがそういうものを避けていて、言葉で想像させるようにしている。そのため画像は使わないことにしている。

なぜベストか、という点については、1930年代の終わりにアントナン・アルトーという劇作家がベストについて論じており、そのことが関わっている可能性がある。また演出家のジャン＝ルイ・バローが1940年代にベストをもとにした芝居の演出をカミュに持ちかけたことがあった。一度は断るが、のちに『戒厳令』という芝居の制作につながっている。

そしてやはりリスボンの大地震があるだろう。ルソーの発想は、社会が災厄を保障するという社会保険の考え方とも結びつく。しかしベストの場合は感染するという点で社会の連帯が寸断される。本来連帯が生じるはずの局面が、伝染病によって侵されていく。それを描いた理由には占領ということもあったのではないだろうか。

4. 第3セッション「『死の舞踏』に見るキリスト教的死生観」

[発題]

小池寿子

発題者は「死の舞踏」という図像の研究を行っている。「死の舞踏」は15世紀から16世紀にかけてヨーロッパで流行したもので、死者が生者を墓地、すなわち死へと誘う姿を、行列ないしは輪舞として表現した図像である。この図像の流行がベストの流行と関わるかどうかが議論的になっているが、ベストのような大量死が死の問題と深く関わっていると考えている。また「死の舞踏」の伝播については、版画や演劇など複数のメディアが影響を及ぼしたという

見通しを持っている。

記録に残る最古の作品は、パリの中心部サン・ジノサン（罪なき聖幼児）共同墓地を囲む回廊に描かれた壁画であり、1424年8月から翌25年2月頃までの間に制作されたと見られる。1485年にパリの印刷業者ギュイヨ・マルシャンが木版冊子本として出版したものによれば、死の舞踏は死者と生者が踊るような足取りでステップを踏んでいく舞踏行列図である。教皇や皇帝など身分の高いものから低い者へと次々に死者に誘われて墓場に赴く。下には詩が添えられており、テキストとイメージが合体している作品である。

ではいったい死の舞踏の実態とはなにか。1424年にはじめてダンス・マカーブルという言葉が文献に出てくるが、そのとき果たして舞踏だったのか、壁画だったのか。

キリスト教、ユダヤ教では、神は見えない存在だ。その見えない神を画像として表現しているのかという問題がある。けっきょくは表現してよい、ということになるのだが、その論争は長い間展開し、とくに8世紀から9世紀にかけては、聖なる画像を描いてはいけない、被造物である人間はみずからの手でものを生み出してはいけないという議論が展開していった。しかしそれが覆っていくのは、ラテン語を読めない民衆への宗教教育には、イメージが必要であるという考えからである。

そうすると言葉の厳密さから離れ、イメージが一人歩きをするという現象が起こる。同じイメージをみた人が同じような受け取り方をするとは限らず、また違うイメージを生み出す可能性がでてくるとのことだ。

そこでヨーロッパの中世研究における民衆と文化のありかたについては、識字率、メディア、教会の介在といった美術史を越えた歴史学が必要となり、発題者はそうした歴史人類学的な西洋美術史という立場に立つ。

ボッカチオの『デカメロン』の冒頭、フィレンツェに疫病が流行したとある。そしてそれは

天体の影響なのか、また神の怒りなのかと記される。天体の影響というのは運命論となる。キリスト教の神義論とはまた別の流れだ。つまり運命か、キリスト教的な考えからくる神の懲罰なのかという問いである。この二つの立場が14、15世紀のペストの蔓延のなかで起こった。

16世紀初頭のグリューネヴァルトの「イーゼンハイム祭壇画」は、ペスト、麦角中毒、らい病の三つの病の症状を描ききっているとされる。そしてそれぞれの守護聖人も描かれた。

こうした中世のなかで、死の舞踏が15世紀フランス、北イタリア、ドイツで描かれていった。北イタリア、クルゾーネのサンタ・マリア・アッスンタ教会の外壁にある死の舞踏には、むち打ち苦行者が描かれている。ここではペストが神の懲罰ととらえられており、クギなどがささったムチでみずからの体をうちながら、血だらけになって巡礼地を歩く人々である。その姿がほかの人々を熱狂させ、さらに彼らがまねをしはじめる。そういった現象が13世紀から15世紀に繰り返されてきた。つまりなにかが起こるとそれを神の懲罰ととらえ、悔い改めようとする運動が起こってきたということである。

死の舞踏が最初に描かれたのは、パリのサン・ジノサン墓地である。その外壁に描かれていた。もう見ることはできないが1570年頃に画家がその絵を描いており、そこから様子を知ることができる。かつてこの墓地では、死体を埋葬し、腐って白骨化したものを納骨堂に置くようにしていた。次第に何万、何十万という死体が葬られていったため、土壌が劣化し、ガスも出てきたため、18世紀には墓地の郊外移転がなされる。このようにして墓地が日常から遠ざけられ、死が隠蔽されていく時代へと変わる。

さて、あらためて死の舞踏が見るためだけだったのか、という問題を考える。フランスブルターニュのケルナスクレダンの教会堂には、北に天国が描かれ、南に地獄と「死の舞踏」が描かれる。これは立地との関わりで、まず訪れたときに目にするのが「死の舞踏」や地獄に

なっている。

ラ・シェーズ・デュというベネディクト会修道院の教会では、一般信徒が入れない、聖職者しか入れないところに「死の舞踏」が描かれている。これは聖職者自身が踊っていたと推察している。

またブルターニュのケルマリアの教会堂は、1190年頃のロマネスクの教会堂を改築したものだが、かなり高い位置に「死の舞踏」が描かれている。これは説教を行ったときに「死の舞踏」のポエムを朗唱したと考えられるだろう。加えてシャルトル近郊の15世紀の教会堂では、説教壇があり、絵を背景に説教を行ったという様子をうかがい知ることができる。

このように「死の舞踏」の描かれる場所が異なるのは、その果たした機能が違うからではないかとも考えられる。

「死の舞踏」は説教のときの絵解きにも使われただろう。またその場所が一般の人も見ることができものであるなら、「死の舞踏」を見たり、文字を読んだりして、人々はやがて来たる死について思いをはせていたはずだ。

15世紀エストニアのタリンにある「死の舞踏」は、タピスリーに描かれている。教皇、死者、皇帝、死者、皇妃、死者というように展開していき、まだこの世を楽しみたいのに死ななければならないのか、という台詞があるが、容赦なく連れて行かれてしまう。この聖堂は、商取引も行った場所である。おそらく葬儀のときだけこの「死の舞踏」の布を巡らせたのだろう。このことは、墓地や墓所など墓と関わる場所に描かれる「死の舞踏」が15世紀に成立したことを意味する。

15世紀に「死の舞踏」を出版したギョイヨ・マルシャンは、現在から死がもたらされたと述べている。「死の舞踏」のコンセプトは、死者と生者が鏡の関係にあり、それは見るものにとっても鏡であるということだ。

このような「死の舞踏」は、やはりもともと民衆的な踊りだったのだろう。キリスト教が根

付く以前の、ケルト、ゲルマンの文化で人々が持っていたような、民衆のエネルギーの発露としての舞踏、演劇、音楽。そこから生まれた舞踏を、キリスト教が土着の文化を吸収しながら、みずからのものにしていき、道徳教訓的な踊りに仕立て上げ、絵画に仕立て上げ、説教の絵解きに用いたと解釈できる。中世の宗教教育のきわめて大きい部分を、「死の舞踏」は担っていたのであろう。

[コメント]

平藤喜久子

近代の特徴として、性がオープンに表現されるようになったのに対し、死が見てはいけないもの、のぞき見の対象になるという、いわゆる「死のポルノグラフィー化」ということが指摘されている。それはキリスト教の価値観が西欧社会で弱まっていったことと関わるという研究でもあった。悲惨なニュースで遺体を撮さないという姿勢がある反面、インターネットで死体を検索する人は多く、そこでのぞき見の欲求を見たそうとしているようだ。隠されているからこそみたいということだろう。

発題のなかでサン・ジノサン墓地が郊外移転する頃から死がタブーとなっていたという話があったが、このことも死のポルノグラフィー化を連想させた。

では「死の舞踏」を眺めている人たちはどうだったのだろうか。グリュネヴァルトの祭壇画のようなものが描かれていくのは、そうした死を見たいという欲求ではないのだろうか。死のポルノグラフィー化がほんとうに近代的な心性なのかどうかと考えさせる。

また最近日本では子供向けに地獄のことを描いた絵本が売れている。人間をなますにする図像など、かなり恐ろしい内容だが、道徳的な目的で幼稚園などでも読まれているようだ。恐ろしいものを見せて道徳に使うという発想だ。同じように「死の舞踏」も道徳教訓的に使われていたということだが、「踊り」がなぜ道徳教訓

的なものに使われるのか。死者が踊ることと道徳との関わりを知りたかった。

[応答]

小池寿子

鎌倉時代に九相図という死体の腐敗過程を九段階で描く絵巻が作られた。末法思想が流布した時代である。ヨーロッパでもイタリアのピサの大聖堂脇の墓地の回廊壁画には、死後膨張、腐敗、白骨化という死後の肉体の3段階の様子を描いている。これは墓地に参拝する人々の見る壁画だ。これらはもちろん人間の終末に思いをはせるためでもある。この絵は、長年ペスト流行後に描かれたとされていたが、30年ほど前にペスト流行前に描かれたことが実証された。つまり14世紀前半、説教師たちが社会不安のなかで登場し、巻物や絵を掲げて説教をした。死後膨張、腐敗、白骨化は、文明の繁栄と爛熟、凋落とも重ね合わせることができるだろう。

またたしかに好奇心の問題もある。メディアが少ない中世において死体は好奇心の対象の一つだった。どんなに醜いものでも、死体が転がっていると聞けば見に行ってしまう。そういう人間の好奇心の対象に死体もなっていたのだろう。

舞踏は、ケルト、ゲルマンだけではなく、ギリシャ・ローマの伝統も影響しているだろう。それは修道士たちが必ずしも完全にキリスト教化されたわけではなかったということもある。加えて見せびらかす行列という意味合いも強い。ダンスというと踊りというイメージだが、procession（行列）に近いダンス、すなわち見世物ということだろう。

5. 第4セッション “Resurrecting Jesus —Pop Cultural Transfigurations of the Savior in Film, Manga, and Anime” 「映画、マンガ、アニメにおける救世主 のポップカルチャー的変容」

Mark MacWilliams

〔発題〕

「イエスはどのような姿だった？」これはキリスト教の牧師であるトッド・バーボ氏が虫垂炎の緊急手術で死の淵から生還した息子のコルトンに尋ねた言葉だ。この質問は、何世紀もキリスト教徒たちを魅了する。この話にアメリカ人の76パーセントが共感している証に、彼の息子がイエスの膝に座ったという臨死体験を記したバーボの著書『天国は、ほんとうにある』が、ニューヨークタイムズで94週のベストセラーという記録をだしている。

幼少期、オハイオ州ペリースバーグの長老派教会の何もない壁に唯一掲げられていたのはシンプルな十字架だけだった。しかし聖書を受け取るとき、一緒にポケットサイズのイエス・キリストのポートレートも受け取った。それは1940年のワーナー・サルマンの有名なキリストの肖像で、茶色の髪にブルーの目を持つ白人のイエス。アメリカで最もポピュラーなキリストのイメージ像として、500万部以上もコピーされたものだ。このポートレートは、ハリウッド映画の「キング・オブ・キングズ」や「偉大な生涯の物語」、クリスマスやイースターのときにテレビでみるイエス・キリストのイメージそのものだった。

このように多くのアメリカ人が、テレビや映画、本などマス・メディアを通してビジュアルのイエスを知っている。この発表ではそうしたアメリカと日本のポップカルチャーにおけるイエスの変容を探索していく。

アメリカ人に「イエスはどのような姿をしていますか？」と尋ねると、彼らはローブを着て、いばらの冠を被った白人の30代の男性を思い浮かべるだろう。このイエスはまさに、「シンプ

ソنز」や「サウス・パーク」といった有名なギャグマンガの中に現れる姿だ。他方ステファン・プロセーロが最近記したように、イエスは図像学的には「カメレオンのような」存在でもある。黒人のイエス、ゲイのイエス、平和の神イエス、戦士ランボー・イエス、スーパーマン・イエスそしてオバマ・イエスなど、様々な姿に偶像化されている。60年代のウーマン・リブの高まりと共に、性別すら変わった。

この多様性を探究するため、アメリカと日本のポップカルチャーから2種類のキリスト像を取り上げたい。一つはハリウッドで大ヒットしたメル・ギブソン監督の「パッション」、もう一つは、最近人気のマンガ、中村光の『聖☆おにいさん』だ。

ギブソンのイエスは、みかけは聖書に由来するように見える。中村のイエスはハリウッド映画の古典的なイメージだ。これら「パッション」や『聖☆おにいさん』の中のポップなキリストは、現代の聴衆に対して神聖なるものを表している。彼らは、人々にその作品を購入したくなる気持ち行動を起こさせるほど、強い力を持っている。そしてギブソンのキリストは神の子である超人、保守的、かつアグレッシブな男らしい救世主を示すが、それに対して『聖☆おにいさん』のキリストは人間の救世主、「新ニッポン人」としての人生を謳歌する堅実なキリスト像を表現する。

メル・ギブソンの「パッション」はイエスの神聖な伝記が物語の中心になっているクラシックなキリスト映画の一例だ。エルサレムでの逮捕にはじまり、十字架での死までを映像化する。復活は素っ気なく流し、苦痛と死に焦点をあてる。

この映画はアメリカの福音派とカトリックの聴衆を意識し、灰の水曜日に初日を設定した。もちろんそこには、ヨハネ・パウロ二世の「この映画はありのままだ」というコメントなどもあった。しかしこのイエスの苦しみの取り上げ方は感情的に歪曲されている。にもかかわらず

敬虔なクリスチャンには、奥深い魂からの信仰心を引き起こした。それ以外の人々には、評判は悪かったが。

この映画のポイントは、アメリカ人のクリスチャンが幼少期に抱いていたイエスのイメージを反映しているということだ。それは、典型的な白人であること。また超自然的な力を持つ姿を持つことである。映画の冒頭から、それは強調され、奇跡が描かれる。また、傷ついたイエスの死体を描いた上で、最後のシーンでは、復活した姿も描き出す。その姿はアーノルド・シュワルツネッガーの「ターミネーター2」を思い起こさせる。

「パッション」のイエスは、自虐的な男らしい救世主だ。この映画は心をかき乱す暴力とSMの映画といって過言ではない。目を背けたくなるようなローマ兵士によるむち打ちのシーンは、ルカの福音書23章16節の「私は彼をムチ打つでしょう」の一節に基づくが、そのイエスは「強く、ストイックで、ボコボコに叩きのめされても少しも泣くことのない男らしいイエス」なのだ。これはサディズムが信仰の中心であり、他の人々の苦痛を背負う、野蛮なイエスになっているともいえるだろう。

中村光の『聖☆おにいさん』は、2006年から、講談社月間モーニングに掲載されているギャグマンガだ。仏陀とイエスが突然、天国から東京の立川にやってきて同居し、バカンスを過ごすという話である。聖人 in 立川「笑いは世界さえも救う！こんなマンガはかつて見たことがないでしょう！！」という。「ぬくぬくコメディ」と表されるこの話は、ギブソンの「パッション」と正反対。古代中東ではなく現代の日本を舞台に、天国から復活した姿ではなくこの世界の人間の姿をし、厳格な救世主ではなく楽しい愛すべき神で、人間の罪を背負って拷問を受ける代わりに、楽しい生活をエンジョイしている。ギブソンの苦痛と贖罪の悲劇とまったく違ったコメディだ。

神の子をこき下ろしていると感じる人もいる

だろう。西洋のメディアでは、こうしたユーモアは珍しくない。「サウス・パーク」もその典型的な例だ。ここではイエスは低視聴率のトーク番組のホストになっている。ゴードン・リンチは、このようなユーモアについて、ポップカルチャーは、はたして神聖なるものから、精神的な重厚さとひきつける力を奪うことができるのだろうかという異論を唱えている。

中村のユーモアはたしかに神の子イエスを天国の台座から下ろしている。地元の公共プールで泳ごうとするイエス、水をワインに替えるイエス、注連飾りを飾らずに茨の冠の代わりにかぶるイエス、祈りの言葉を羅列するように滑稽なコマを並べ、笑わせる。

しかし、われわれがそのオチで目にするイエスのおかしさは、彼の人間らしさなのだ。これは聖年である青年についての面白い話だということもできるだろう。第一巻のカバーで仏陀とイエスは、スニーカーをはいた質素な白いTシャツにジーンズ姿の新ニッポン人の姿だ。この聖人たちはともに20代の青年で、東京の街に普通に溶け込んでいる。コンピューターゲームが好きで、ミクシーにブログを書くオタクで、たまに衝動買いをしたり、自分をジョニー・デップと比べてみたりする。ファンはこの聖人の人間的要素に深く魅了されるのだ。常人と同じような欲望に葛藤するイエスはたいそう魅力的だ。

多くのファンは『聖☆おにいさん』を読んで「とても癒される」と評する。「癒し」とは、彼らがイエスの愚かさで少なくとも一時的に、彼らの日々の問題や不安から開放されるという意味だろう。

今の時代に宗教を学ぶということは、宗教団体を研究する以上の意味を持つ。宗教と霊性を追及するということになる。それはポップカルチャーのような「意外なところ」に存在する霊性も研究することなのだ。前述したイエス像はエンターテインメントの問題だけではないのだ。神はどこに存在するのか？ それは神の子とし

て罪を償う「パッション」、新ニッポン人として、現代に生き、笑いによって癒す『聖☆おにいさん』の中にも見出せるのだ。

[コメント]

小原克博

発題者によるイエスとは一体誰か、という問いだ。アメリカのイエスのイメージもあるだろうし、日本のイエスのイメージもあるだろう。そこには大きな違いもある。ギブソンも中村光もそれぞれの文化を背景にしている。そしてその文化がポップカルチャーであるという点がポイントだ。そのポップカルチャーが日米で違うからこそ、まったく違う描き方がなされるという点が興味深い。

白人イエスのポートレートは、イエスのイメージを再生産してきた。それが意味宗教文化教育になっているといえるだろう。そのイメージの繰り返しによってイエスとは誰かをすり込まれていく。そして実際には白人ではないにもかかわらず白人男性として理解していく。そのため黒人の学者は黒人イエスを描くようにもなった。映画『マルコムX』でも、刑務所での宗教の時間に、イエスは白人かをめぐって黒人のマルコムXが議論をする場面があった。

1990年代以降、アメリカでは歴史的なイエスを探る関心が高まり、イエスの新しいイメージをたどることへの大衆的欲求も広がった。そういう意味では、イエスの理解に対する幅が広がってきたということは、肯定的に評価できるだろう。アメリカにはこうしたオープンなイエス理解がある一方で、保守的な解釈もあり、それらが対立しながら共存している社会だということができる。

アメリカの世論調査会社、ギャロップやピュー・リサーチセンターなどによれば、保守派の人々が信じているのは判断を下す神、悪いことに対して罰を下すような神である。そうした人々にとっては死刑制度があるのは当然となる。だから保守派のクリスチャンは、死刑制度

に肯定的だし、いざというときに悪者を撃ち殺す必要もあるので銃の保持も指示する。医療保険制度も、これまでの行いで貧しくなり、苦しむのはしかたがないという態度を示す。

このようにイエスの理解、神の理解は、人の心の問題だけではなくて、アメリカという社会制度のあり方そのものにも影響を与えているといえることができる。

それに対し、日本では『聖☆おにいさん』に先だって人間イエスが描かれてきた。安彦良和の『イエス』は復活しない。遠藤周作の描くイエスも人間的だ。今年でた本に『寅さんとイエス』という本もある。寅さんとイエスには共通点があるというように日本人はみるのだ。

また『聖☆おにいさん』の場合、人間らしさとともに「ゆるキャラ」という側面も持つ。そういう癒し系、ゆるキャラ的なものが日本のサブカルチャー、ポップカルチャーの中には確かにあるのだろう。

反面日本のアニメには、終末論的なものもある。『エヴァンゲリオン』などがその代表だろう。世界そのものの破壊につながるような、終末論的な要素もつ。このようなゆるさと終末論的な部分、これがポップカルチャーの基本にあると考える。

ところで『聖☆おにいさん』が描くようなイエスは、アメリカ人に受けるのだろうか。ムハンマドが登場する可能性はあるのだろうか。その点を知りたいと思った。

[質疑応答]

発題者から、『聖☆おにいさん』は日本風の冗談が多く、アメリカ人にはそういう点を伝えるのが難しいという回答があった。また会場からは、江戸時代の日本でも神、仏、達磨などをパロディで描く見立て、が流行し、聖なるものを俗に変更し、その落差を楽しむということが行われたという指摘があった。

6. 総合討議

四名の発題を受け、フロアとの質疑応答が行われた。主な質問と応答を紹介する。

小池氏に対し『死の舞踏』が描く宗教文化は現代とどう接続するのかという質問があり、それに対する応答として、現代は死が露出しなくなったが、逆にポップカルチャーやサブカルチャーでは映像としての死に触れる。その映像としての死をわれわれがどう捉えるのかという点が問題となる。その点でビジョンの時代である中世との比較可能性があると示された。

また、「死の舞踏」と教会、修道会の関係についても質問があり、発題者からはフランシスコ会とドミニコ会が積極的に「死の舞踏」を説教に取り入れていったが、印刷業者や版画家が登場することで、より大衆に広まっていったという回答があった。

マックウィリアムズ氏の発題に対し、キリスト教が行ってきたイエスのイメージの造形は、福音書が参照枠となり、歯止めともなっていたが、ポップカルチャーにとってそのような歯止めはあるのだろうかとの質問があった。これに対しては、たしかにかつてはハリウッドでも教会の教義との関わりでイエスの映画が作られていたが、現代は自由の時代であり、個人的に自由なイエスをつくって、信仰を表明するようなことがあってもよいのではないか。それが宗教の発展にも資するのではないかという応答があった。

全体に対して、とくにヴィジュアルイメージに制限を課すイスラームの位置づけについてどう考えるべきかという質問があった。小原氏からは、最近アラブ首長国連邦ではモダンアートの展示会があり、制限はあるものの、変化の兆しの一部見られるのではないかとあった。また有田氏からは、偶像崇拜の禁止の厳しいユダヤ教に関していえば、19世紀から20世紀にかけてモディリアアーニやシャガール、キスリングなどユダヤ系の画家たちが数多く出てきた。これら

も変化の兆しと考えられるのではないかという指摘があった。

アメリカの大学で教えているストリッポリ氏とマックウィリアムズ氏に対し、ファンダメンタルな傾向が強まっていると指摘されるアメリカの教室で、ポップカルチャーを取り上げることは難しい点があるのではないかととの質問があった。マックウィリアムズ氏は、大学にはカトリックの学生が多いが、現代の学生は自分たちの宗教についてよく知らない人が多い。そのためあまり気にする必要はないと述べた。ストリッポリ氏は、ニューヨーク州立大学には、さまざまな学生がいるが、ファンダメンタルな学生はほとんどいない。基本的に柔軟な思考をもった人が大学に入学している。また、どちらかというと宗教よりもジェンダーについての問題のほうが過敏に反応するとした。

最後に司会から、現代は自分たちの文化についてもよくわからなくなっており、常識が共有されていないなかに異文化の情報が入ってくるという状況になっている。そうした時代に宗教文化教育を行うためには、個人の知識だけではなく、教員たちの情報の共有や協力が必要であると述べられ、締めくくられた。